

令和6年秋の外国人叙勲台湾人受章者（3名）に対する叙勲伝達式の実施について

昨年11月3日、日本政府は令和6年秋の外国人叙勲受章者を発表しました。台湾からは3名が受章され、李嘉進氏が旭日重光章、林清波氏が旭日小綬章、呉素琴氏が瑞宝単光章を受章されました。台湾にて、片山和之・台北事務所代表より、昨年12月26日に林清波氏、今年3月6日に呉素琴氏、同月24日に李嘉進氏に対して、それぞれ勲記および勲章の伝達を行いました。

日台関係の発展のために長年にわたりご尽力されました受章者の皆様のご貢献に衷心より敬意と謝意を表します。

李嘉進氏

勲 等：旭日重光章

主要経歴：元亜東関係協会会長

功績概要：日本・台湾間の友好親善及び相互理解の促進に寄与



受章者のことば

私が長年日本との交流に尽力してきたことを、詳細にまとめ、その意義を明確に指摘して下さったことに、片山代表、日本政府に心より感謝申し上げます。この勲章の荣誉に深く感謝いたします。

二点ご報告申し上げます。親戚や友人から「なぜあなたはこれほど日本を愛し、研究に情熱を注いできたのか」とよく聞かれます。その経緯をご説明いたします。

私は大学2年生の1976年に日本語の学習を始めました。それ以前の大学1年生の頃、父に「大学卒業後、海外留学したい」と相談したところ、父は日本語で「血を流す覚悟があれば日本へ行け。日本は世界一だから」と言いました。当時、私は日本語を理解できず、父の真意を尋ね、日本語学習を開始したのです。もしあの言葉がなければ、米国に留学していたかもしれません。

その後、父の言葉の真意を探るため、調べました。父は母と1944年、大阪で働きながら出会い、結婚し、1964年に台湾に戻っていました。父の経験が、私の真剣な日本語学習、そして1987年（30歳）の日本留学へと繋がったのです。当時、仕事を持ちながらの留学は困難でしたが、妻には「どうしても勉強したい」と伝えました。留学生ビザの取得や名門大学の入学は容易ではありませんでしたが、妻は「あなたが勉強に専念できるように、私は一緒に行かない。2歳の子供を一人で育てる。早く帰ってきてください」と支えてくれました。1990年、使命を果たすため台湾に戻りました。妻への感謝と家庭への恩返しとして、すぐに子供をもうけました。

1990年以降は、日本で学んだことを活かし、様々な経験をしました。日本のバブル崩壊期に経済部で働き、国営企業の改革・再編に携わり、経済部模範公務員賞を受賞しました。1998年の立法院改選では、李登輝總統と連戦副總統に推薦され、4期連続で当選しました。立法院では黄健庭秘書長と同僚でした。その後、2008年頃からは、

国家安全会議諮問委員、亜東関係協会会長として勤務しました。

退任時、李登輝前総統から「契約の精神」という言葉を受け継ぎました。それは、日台関係を深めるための漁業協定などの合意の精神です。これが、私が日本に特別な情熱を持ち、努力を続ける理由です。

次に、日台関係への貢献について報告します。2011年3月11日の東日本大震災発生直後、私は国家安全会議を招集し、日本への支援を全力で実施しました。IAEA発表の被災面積は台湾の面積に匹敵する規模であり、政府を挙げての支援体制の構築に尽力しました。

また、2011年9月22日に署名された日台投資協定の成立にも関わりました。そして、2013年4月10日に締結された日台漁業協定についても、安倍晋三首相（当時自民党総裁）との緊密な連携により実現しました。その過程で、安倍氏と直接協議し、迅速な合意形成を図った経験があります。

さらに、亜東関係協会会長として、日本の47都道府県を訪問し、日台関係の強化に尽力しました。東日本大震災被災地への訪問では、感謝の気持ちを伝えるために自作のTシャツを着て、被災者の方々を励ました。

日本との交流を通して、多くの協定締結に携わってきました。1972年から現在まで40件近い協定に関わったと推定されます。国家安全会議諮問委員から亜東関係協会会長まで、3年間の職務において一定の成果を挙げることができたと思っています。

日本との関係は、政党や個人の枠を超えた長期的なものです。今後とも、日台間の更なる交流促進に貢献したいと考えています。

片山代表、日本政府よりこの栄誉を賜り、生涯最大の喜びです。この喜びを皆様と分かち合い、御列席の皆様の健康と御多幸を祈念いたします。ありがとうございました。

林清波氏

勲 等：旭日小綬章

主要経歴：互助營造株式会社総裁

功績概要：日本・台湾間の経済交流の促進に寄与



受章者のことば

皆さま、こんにち。まず初めに、旭日章という大きな栄誉を授けてくださった日本政府に心より感謝申し上げます。また、この盛大な伝達式を開催してくださった日本台湾交流協会の片山代表に深く感謝いたします。お陰様にて、本日は私の人生で最も光栄な出来事になりました。

私の先祖は260年前に中国福建省泉州から現在の新北市汐止地区へ移住しました。それ以来十代にわたり受け継がれ、私は台湾にきた先祖の七代目にあたります。私の両親はともに日本の明治天皇の時代に生まれ、私は戦前の昭和時代に生まれたため、私たちの生年月日はすべて日本の天皇の元号で表されています。父は国立台湾師範学校を卒業した後、日本の明治大学に進学し、日本での学業期間中、朝夕に新聞配達をして生活費を稼いでいました。しかし、卒業目の一年を前にして、家族からの学費支援が得られず、学業を修了することができずに台湾へ戻ることになり、大変残念な思いを抱いていました。

父の背中を見て育った私は、48歳の時に日本の近畿大学通信教育学部が私の学習条件に非常に適していることを発見しました。その理由は、近

畿大学の創立者である世耕弘一先生の理念「学びたい人に学びの機会を」に深く共感したからです。そこで私は入学を決意しました。毎年、数多くの日々を会社の制服を着たまま台北空港から夜便に飛び乗り大阪へ向かい、若い学生たちと一緒に授業を受けていたのを今でも鮮明に覚えています。最終的に、私は父の夢を実現する形で、日本の大学の卒業証書と近畿大学の名誉博士号を取得することができました。本日、近畿大学の世耕本部長もお越しいただいております。この場を借りて、近畿大学に深く感謝申し上げます。

片山代表が先ほどのような挨拶で、私が日本の建設業の台湾での発展に貢献したとおっしゃいましたが、恐れ多い限りです。実際のところ、第二次世界大戦後の台湾社会の基盤整備が復興から繁栄へと向かうことができたのは、日本の建設会社による技術支援の存在が否定できないからです。1973年、台湾は十大建設を推進し、高雄では造船所と製鉄所の建設が行われました。この二つのプロジェクトは日本の鹿島建設が元請けを務め、互助營造が鹿島建設の協力業者として関わりました。これが日本の建設業との台湾での協力の始まりでした。1983年、日本の鹿島建設は台湾で中鹿營造公司を設立し、私はその初代取締役会のメンバーとして招待されました。台湾に進出した日本の大手総合建設業者は最多で15社に上りましたが、現在では9社が活動しています。その中で、互助營造は大林組や鹿島建設と共に17のプロジェクトで協力してきました。本日は、海外からお越しいただいた大林組アジア地区中山支店長そして台湾大林組營造公司の今井董事長、及び中鹿營造公司の小俣董事長もご来席賜り、この場を借りてご三方に改めて感謝申し上げます。また、民間の建築プロジェクトの多くで、日本の建設会社や設計者が請負を担っていることをメディアで目にします。建築業者の話によると、これにより販売価格や販売率が大幅に向上するとのことでした。このことから、日本の建設業が台湾で定着し、非常に高い評価を得ていることがわかります。

ホテル事業においては、ホテルロイヤルニッコー台北が今年ちょうど40周年を迎えました。このホテルは、台湾で外国のホテル運営会社を導

入した二番目のホテルであり、初めて日航ホテル運営会社（現在の大倉日航ホテル運営会社）に運営を委託したホテルでもあります。40年以上前、私が日本のホテル運営会社を台湾に招致した際、多くの業界関係者からは賛同を得られませんでした。しかし、私は当時、日本の景気回復が欧米よりも早いと予想していました。開業後、ホテル2階のバーでは日本人客が欧米人客の2倍、消費額も2倍でした。

ホテルロイヤルニッコー台北の日本人客は常に安定しており、長年にわたり全体の八割を占めています。このことは、私の予想が正しかったことを証明しています。

現在、大倉日航ホテル運営会社は台湾で三つのホテルを運営しており、当ホテルは最も歴史が長く、台湾で第一ブランドの外国ホテルとなっています。ロイヤルホテルグループは、当ホテル以外にも、海外に四つのホテルを展開しており、そのうち二つを大倉日航ホテル運営会社に運営委託しています。それはパラオロイヤルホテルとサイゴンニッコーホテルです。本日、大倉日航ホテル運営会社の大倉社長もご出席されています。この場を借りて、大倉社長に心からの感謝を申し上げます。

友人たちはよく私を台湾の親日派の代表だと言います。それに対して私はいつも微笑みながら、喜んで受け入れています。また時には友人にこう話します。「互助營造は50年前、日本の会社から工事用ヘルメットを同業他社に先駆けて導入し、それ以来変わることなく使用しています。それはまるで古くからの友人のように安心で信頼できる存在です」と。

私がこの勲章を受章できたのは、家族の全面的な支援のお陰により事業に専念できたことと、皆さまからの暖かいご支援があったからこそであります。今後も台湾と日本の交流を一層深めるために努力して参ります。

最後になりますが、本日ご出席いただいた皆さまに、私と家族を代表して心より感謝申し上げます。皆さまのご健康とご多幸をお祈りいたします。

ありがとうございました。

呉素琴氏

勲 等：瑞宝単光章

主要経歴：（公財）元日本台湾交流協会台北事務所現地職員

功績概要：（公財）日本台湾交流協会在外事務所活動に寄与



受章者のことば

皆様こんにちは。

本日は、日本台湾交流協会の皆様のお陰で、一生の宝物を戴くことができ、大変恐縮に思います。

28年間の勤務を振り返ると、最初の9年間は査証業務で、ほぼ毎日残業でした。

3年目（編集部注：1999年）の9月21日に大地震が発生しました。台北松山区で倒壊した東興ビルの中に邦人がいるとの情報があり、現場で待機しました。その邦人は、台湾にお嫁に来たばかりの新婚さんで、日本から家族も駆けつけ、私は家族に付き添い、支援をしました。

9年目には、台湾人の渡航が査証免除になったため、査証室の縮小により、領事に異動となりました。通常の領事業務や窓口対応以外に、休日にも渡航書発行や邦人保護対応があり、休日の緊急

事案を担当しました。台風で休暇の日にも大雨の中、出勤したこともありました。

これまで様々な事件があり、悲しい事も、問題を解決できて嬉しかった事もありました。

特に印象に残っているのは、宴会後、階段から転落して重傷をおった邦人の件です。病院で家族に付き添い、心配そうな親と一緒にICUに入ると、看護師から治療放棄書を書くように言われました。あまりにショックで、それを親に伝えられず、上司から家族に伝えてもらいました。

また、約10年前の2015年6月、新北市八仙樂園で粉塵爆発事故が起き、日本から参加した2人の若い女性が巻き込まれました。1人は林口の病院のICUに搬送され、深夜、上司と病院に駆けつけました。医者の応急処置について本人に説明し、上司が邦人女性の家族に電話をしました。ところが、なかなか繋がらず、夜中3時過ぎにやっと親と連絡が取れました。病院で待機をし、気が付いた時にはもう朝の6時過ぎになっていました。幸い、2人とも命は助かりました。微力ながらも人の役にたつ事ができ、とても嬉しかったです。

なぜ人の役にたちたいと思うのか、なぜ人を助ける事が当たり前の事と思えるのか、よく考えると、熱心に道路や橋の建設に寄付をし、常に村人を助けた曾祖父の影響かと思います。その曾祖父は、明治40年（1947年）に藍綬褒章を戴きました。

私が瑞宝単光章をいただけたのは、上司や同僚、お道の先生と家族が私を支えてくれたお陰だと思います。

最後に、

日本台湾交流協会に 感謝

日台友好よ 永遠に

ご清聴ありがとうございました。